

水俣再生に向けた水俣市の取組



- 1 もやい直し
- 2 水俣病資料館
- 3 現在の状況

令和3年11月6日

水俣病資料館 上田敬祐

もやい直しが始まる前の水俣

- 被害者の救済問題、偏見や差別、市民間の感情の軋轢など、様々な問題を抱え地域社会全体が苦しんでいる状態
- 「公害のまち」のイメージが定着、差別・偏見、風評被害
- 市民にとってチッソ存続は死活問題、被害者救済とチッソ存続のジレンマ、だれもが水俣病問題で苦しんでいる
- 市民の心がバラバラ、お互いに批判、水俣病の話題は避けたいという雰囲気

水俣湾環境復元事業の完了



- 1977年から進められていた水俣湾環境復元事業による広大な埋立地の出現
- 埋立地を水俣市の再生・振興の拠点とすることを目指して、埋立地や隣接地の活用、イベント開催などの構想を策定（熊本県）
- 構想を具体的に進めるため、熊本県と水俣市の協働による環境創造みなまた推進事業が1990年にスタート

対立から相互理解へ

- 1989年、県庁内に水俣振興室設置
- 患者と行政の対立は根深く、地域再生は思うように進む状況ではない
- 県主導により、患者や市民のもとに昼夜を問わず通って意見交換、理解を求めた
- 患者、一般市民、行政との対話や交流、水俣病への理解が少しずつ進む
- 徐々に県主導から地元主導に転換、引き続き市民相互の理解促進を図る取組を実施

みなまた10,000人コンサート



- 水俣湾環境復元記念事業の第1弾として開催
- 行政による水俣病隠しのお祭り騒ぎとして、一部の患者や支援者から抗議のビラ配布
- 水俣病に向き合うこと、市民相互の融和の大切さを認識

水俣病問題を正面から捉える



- 世界に向けて水俣病の教訓を訴えるため、1991年に産業、環境及び健康に関する国際会議を開催
- なぜ患者が登壇しないのか、患者のことをもっと知ってほしいといった意見
- 産業による環境破壊と地域社会の対応に関する1992年水俣国際会議を開催
- 4人の患者がパネリストとして参加
- 水俣病の正しい知識の普及、市民の理解促進、教訓の市民への発信を訴え

相互理解の広がり

1992年 環境創造みなまた'92

- こころフェスティバル、世界竹会議、環境水俣病授賞式、産業による環境破壊と地域社会の対応に関する1992年水俣国際などの開催
- 環境モデル都市づくりを宣言
- 水俣再生の第一歩



1993年 環境ふれあいインみなまた

- 環境再生フォーラムにチッソがオブザーバーとして参加
- お詫びを述べるとともに補償責任の完遂や社員教育などを説明
- 徐々に相互理解が広がり始める

犠牲者への慰霊



水俣病犠牲者慰霊式

- 1992年、実行委員会と水俣市の主催により慰霊式を開催、問題の幕引きにつながるとして、3つの患者団体が不参加
- 1996年、3つの患者団体が初めて慰霊式に参列、吉井市長が行政の長として初めて犠牲者に謝罪し、もやい直しの始まりの日と述べる



火のまつり

- 1994年、水俣病で犠牲となったすべての生命への祈りを火に託して届ける火のまつりを開催
- 多くの市民の協力を得て開催

市民の理解促進



水俣病を語る市民講座

- 1993年から1996年にかけて開催

- 患者自らの体験、地域住民皆が被害者、住民福祉の重要性など、患者の声を一般市民が知る機会となった
- 水俣病資料館の語り部制度に



環境への取組



環境モデル都市づくり

- 自然の生態系に配慮した環境モデル都市づくりを目指すことを決意
- 水俣病の教訓を学び、後世に伝えていく
- 被害者の救済と市民の融和を図る



実生の森づくり

- 環境再生を願い種子から命育む森づくり
- 1997年に種まき
- 市民ボランティアの協力のもと、清掃・除草
- 環境学習、草木染などの体験、啓発活動



水俣病の歴史と教訓を伝える



水俣病資料館の開館

- 悲惨な公害を二度と繰り返してはならない
- 水俣病の教訓を人類への警鐘として発信として1993年に開館

公害・環境・人権学習

- 教育旅行、環境学習の誘致活動により学校からの来館が増加
- 公害学習、環境学習、人権学習の場となっている



語り部制度



- 患者に体験談を話してもらえないだろうか
- 行政は敵、あんたは本気か
- 話の内容に注文はしないだろうね
- 1994年7月、濱元二徳さんの初めての語り部講話
- 1994年10月、正式に語り部講話開始
- 入館者の増加に伴い語り部を増員、1995年3人、1997年6人、1999年7人、2002年10人…現在11人（休止3人）
- 2018年、語り部の負担軽減のために伝え手創設

現在の状況

- これまでの取組により、市民の水俣病に対する理解は進んだ
- 学校での水俣病学習により理解が進んでいる
- 現在でも市民には様々な考えがあり、水俣病はデリケートな問題
- もやい直しはまだ途中、今後も継続しつつ時間が必要

ご清聴ありがとうございました